

幕末の六甲山

六甲山が幕末のころには、はげ山とな
り、経過は前回に紹介したとおりである。
この図は、「文久年間兵庫及び神戸の
地誌」の図は、「文久年間兵庫及び神戸の
地誌」の須磨から六甲山にかけて、当時の
様子を描かれている。文久年間とい
うのは、摩耶山天満寺・再度山天龍寺
がわづかな区域に林が残されているも
の、当時六甲山系はほとんどがはげ山
となっていたことがわかる。

牧野富太郎の驚き

植物図鑑でお馴染みの牧野富太郎が、
故郷の高知から上京する途上、船
に乗り着いた時の感想が残されている。

「東京への初旅」

明治十四年四月、私は郷里佐川をあとに、
文明開化の中心東京へ向かって旅に出た。
——中略——高知から蒸気船に乗って海路
神戸へ向かった。私ははじめて蒸気船と
いうものに乗った。

私は瀬戸内海の海上から六甲山の禿山
を見てびっくりした。はじめは雪が積も
っているのかと思った。

土佐の山には禿山などは一つもないから
であった。神戸から京都までは陸蒸気と
よばれていた汽車があったので、これを
利用して京都へ出た。

(牧野富太郎選集より)

3 植林事業の開始

このころの神戸市は、開港後急速に開

港に発展し、上水道も整備されないまま人
口が増え、毎年のようにコレラ、チフス、
などの伝染病になやまされていた。
明治三十年から三カ年をかけて布引の
林が完成したが、貯水池の上流部は
まだ土砂が貯水池に流入していた。
神戸市は、当時の東京帝国大学の本多
博士に調査を依頼し、上流部の防災
策として植林を早急にすべきという報告を
受けた。

明治三十五年(一九〇二)から、本多
博士の指導で、神戸市は大規模な植
林を実施し、九カ年にわたって、六
カクタールの山腹工事を行っている。
この写真は明治三十五年度に実施し
たもので、一〇町一反六畝二十歩に対し
一円余でヒノキ一万本、マツ六万本、
シラカシ六万本を植栽し、約九十年
経過後は、緑が蘇っている。

マツ、クロマツの二種を高木層とし、下
層植生特に低木層が発達し、草本層は抑
圧されたアカマツ・モチツツジ群集に相
当する組成となっていた。植栽工事後約
六〇年でアカガシ、シラカシなど自然林
の要素が芽を出すようになり、今後自然
状態で放置したならば当初から約百〜百
二十年で、アカマツ、クロマツに変わっ
てアカガシ、スタジイの照葉樹が優先す
る極相林に推移すると推定している。

調査は現在も継続されており、第五回
目の調査(一九九五)では、高木層を優
先していたアカマツ、クロマツの一部が
枯死、代わってコナラ、アカガシなどが
成長してきている。ツツジ類、マルバア
オダモ等陽地性落葉広葉樹は減少傾向で、
ヒサカキ、カゴノキ、アカガシなどの極
相林要素の植物の被度が増加傾向にある。
ゆっくりと極相林に移行していることが
わかる。

植林地の植物遷移



ヒノキ

「昭和五十九年 神戸市立教育研究所発行」



①植林後1年目 (明治37年)



5 明治の植林地の
植物遷移の状況
(神戸市再度山北斜面)

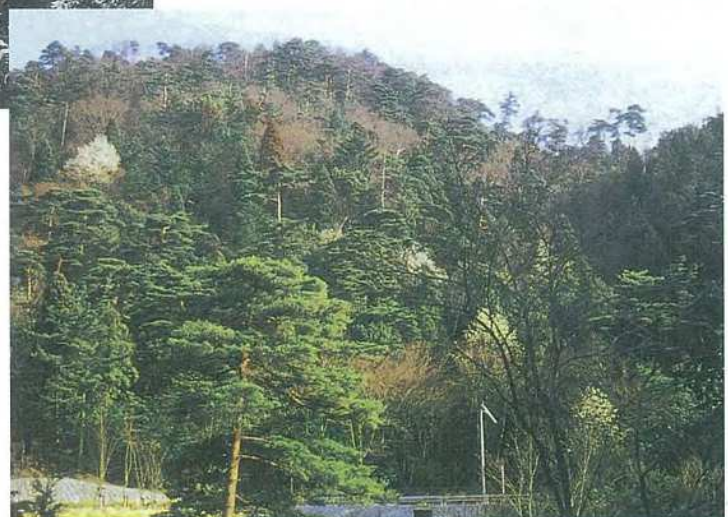
②植林後5年目 (明治41年)



③植林後72年目 (昭和50年)



④植林後92年目 (平成7年)



写真は
再度山永久植生保存地調査報告書
第(回)一九七五)神戸市より
再度山永久植生保存地調査報告書
第五回(一九九五)神戸市より